

『同声・同気』読者アンケート調査報告

玉居子 延子

はじめに

1994年7月、中国帰国者定着促進センター（以下所沢センター）教務課講師会はニューズレターの創刊準備号を発行した。様々な場で様々な問題を抱えながら帰国者に関わる、様々な立場の人たちが相互に情報交換をするためのネットワークをめざしたのである。

帰国者は所沢センターを出て初めて日本の社会に出会う、と言ってもいい。また、所沢センターに限らず、公的な機関で学習することなく日本の社会に入っていく呼び寄せ二・三世もいる。多様な中国帰国者に関わる人たちは現実にどんな問題を抱えているのか、日本語支援であれ生活支援であれ、必要な情報は届いているだろうか、少なくとも、帰国者支援という同じフィールドにある私たち自身が全国の現場で帰国者に関わる人々と繋がっていきたい、その第一歩を始めたい、と準備を始めたのである。一番読んでほしい人は誰か、一番必要な情報は何か、一番読みたいと思う記事は何か。私たちは、私たち自身が知り得た帰国者に関わる人や、帰国者を担当する行政機関等にこの準備号を送付するとともに、各県の担当部署を煩わしてこのニューズレターの送付先として帰国者支援に関わる人を推薦していただくことにした。

準備号の送付件数は533件、教務課講師が知り得た帰国者支援関係者、日本語教育関係者等、ごくわずかな人々宛である。翌95年1月、所沢センター教務課講師会は『同声・同気』と名付けたニューズレターを創刊した。創刊号の送付件数は1410件、この飛躍的な件数の増加は全国各自治体担当部署の協力のおかげである。教務課講師も外部の研修会に出向くようなときには必ず持参して紹介してきた。直接教務課への問い合わせも増え、私たちは確かな手応えを感じながら、以来年3回のペースで号を重ね、2000年9月発行の第19号は送付件数2316件、2340部を数えた。帰国者に関わる人々の情報媒体としては最大、かつ全国的なものに成長したと自負している。

この間、送付先リストのデータベース化をはかり、年一度、自治体担当部署の協力を

いただきながら、手に入る限りの情報をもとに送付先リストの更新を続けてきた。個人リストの大半はこれら県名簿に依っている。自立指導員、身元引受人、自立支援通訳、帰国者が通う日本語教室の教師、生活相談員等、ボランティアも含めて帰国者の生活全般に関わる人たちである。機関リストには帰国者を支援する機関や団体、帰国・外国人児童生徒を受け入れる全国の小・中・高校が含まれる。現在、個人が1282件、機関団体が974件登録されている（19号以降送付リストの更新を行った結果、件数が若干減少した）。私たちはこのリストを頼りに読者をイメージし、しかし、それだけにとらわれることなく私たちなりの判断も加えて紙面構成を考えてきたのである。

しかし、実際はどうか。実際の読者はどんな人たちが、読者はどんな風にこのニューズレターを読んでいるのか、今までの紙面づくりでいいものかどうか…。情報媒体としてインターネットも普及してきた、私たち自身96年3月、インターネット上に同名のホームページも開設した。実際、この不特定多数を対象としたホームページ上の『同声・同気』を、紙媒体読者のどれくらいの人が見ているのだろう…等。私たちは、直接、送付の依頼を受けた方以外には、いわば一方的に送ってきただけに一度は直接読者に問いかけたいと考えた。つまり、具体的に読者構成を知る 紙面構成についての検討資料を得る 読者の通信環境について知る、の三つを大きな目的として今回のアンケート（【資料】参照）を実施したのである。言い換えれば、で支援者像を明らかにし、で支援者の情報ニーズを知り、では今後の情報媒体を探ろう、というものである。

対象は、個人リストに登録されているすべての方と、機関団体のうち小・中・高校の担当者の方に絞った。『同声・同気』第19号にアンケートを同封したのは個人宛1298件、機関宛425件の計1723件である。集計作業に入る（平成12年11月1日）までに寄せられた回答は455件、回答率26.4%である。

以下いくつかの項目をクロスさせて集計分析した結果を報告したい。

ここでいう支援者とは、基本的に回答を寄せて下さった読者を指している。

・集計と分析

(1) 地域別回答者数

表1 地域別回答者数の一覧表

北海道	青森	岩手	宮城	秋田	山形	福島	茨城	栃木	群馬	埼玉	千葉	東京	神奈川
16	15	4	6	1	7	9	6	7	4	20	17	60	29
山梨	新潟	長野	静岡	富山	石川	福井	岐阜	愛知	三重	滋賀	京都	大阪	奈良
8	7	28	10	0	10	1	1	9	4	2	14	26	15
兵庫	和歌山	鳥取	島根	岡山	広島	山口	徳島	香川	愛媛	高知	福岡	佐賀	長崎
14	1	1	8	2	15	2	2	7	1	6	14	6	9
熊本	大分	宮崎	鹿児島	沖縄									
9	0	8	10	0									

回答なし4件

ベスト5をみると、ほとんどが大都市圏で、それに長野県が加わっている。これは帰国者が集中して大都市圏に住んでいるということであり、視点を変えれば大都市圏居住者以外にはなかなか支援者がいないということでもあるといっている。また、長野県の回答者が東京、神奈川に次ぐという結果は、その歴史的背景からして大いに頷けることである。

(2) 年代と出身

(2) - 1 年代

455人のうち、70代以上が37%を占めている。40代から60代まではほぼ似たような比率であり、これを見ると『同声・同気』の読者の55%が60代以上であることがわかる。2・30代は10%に満たない。

表2 年代

	20代	30代	40代	50代	60代	70代~	無回答	総数
人数	5	33	81	82	81	168	5	455
割合	1%	7%	18%	18%	18%	37%	1%	100%

(2) - 2 出身

ここでの「その他」は、外地からの引き揚げ経験を持たず、中国帰国孤児本人及びその家族でもない日本人をいう。回答の選択肢が適切でなかったからか、16件の無回答は残念であったが、34%の人が自身もまた共通の体験を持っている、ということができる

だろう。さらに、「その他」に該当する人のなかにも間接的とはいえごく身近なところに支援の動機を持っている人も多いのではないだろうか。

表3 出身

	引揚者	帰国者本人	中国台湾等	他外国	その他	無回答	総数
人数	125	32	24	3	255	16	455
割合	27%	7%	5%	1%	56%	4%	100%

(2) - 3 年代と出身

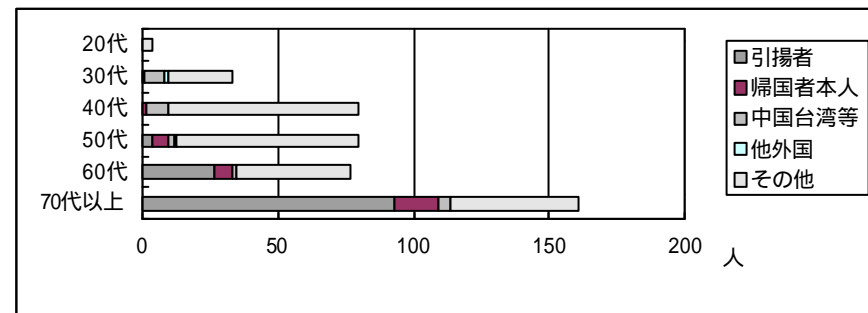
当然ながら「引揚者」は50代以上である。「帰国者本人」も孤児世代であれば50代以上でなければならないが、回答には30代もある。ここには二世も含まれている。「引揚者」のうち70代以上が75%である。この70代以上を「引揚者」と「帰国者本人」に限って見ると合計109人でこの年代の70%、全体の25%に当たる。つまり、帰国者を支援する人の1/4は実に70代以上の引き揚げ・帰国体験者なのである。

表4 年代 / 出身

	引揚者	帰国者本人	中国台湾等	他外国	その他	総計
20代					4	4
30代		1	7	2	23	33
40代		2	8		70	80
50代	4	6	2	1	67	80
60代	27	6	2		42	77
70代以上	93	16	5		47	161
計	124	31	24	3	253	435

(単位:人)

グラフ1 年代別出身構成比

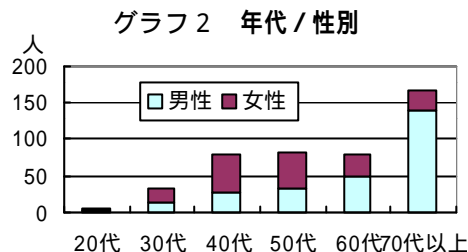


(3) 年代と性別

表5 年代/性別

	男性	女性	総計
20代	2	3	5
30代	14	19	33
40代	28	53	81
50代	34	48	82
60代	51	29	80
70代以上	139	29	168
総計	268	181	449

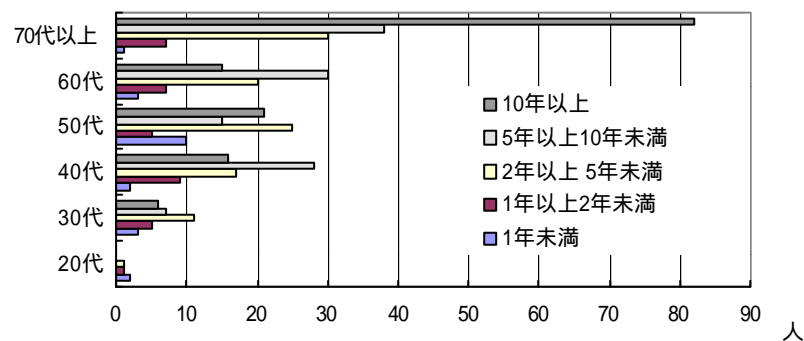
(単位:人)



(4) 年代と活動歴

10年以上帰国者に関わる人は圧倒的に70代以上が多い。帰国者支援においては、高齢者が長期的に活動に関わっていることが一つの特色だろう。

グラフ3 年代/活動歴



(5) 年代と立場

(5) - 1 立場

表6 立場(複数回答)

	自立指導員	身元引受人	支援通訳	受入校教師	日本語教師	生活支援ボラ	日本語ボラ	その他	無回答
人数	187	170	70	42	99	52	50	51	7

(5) - 2 年代と立場

自立指導員、身元引受人、支援通訳、生活支援ボランティアとして関わる人の50%前後を70代以上が占めている。これらの立場に20代は一人もおらず、3・40代ではいずれも25%に満たない。また、受入校教師(公立校教師)は3・40代が中心であり、当然ながら6・70代はいない。

表7 年代(無回答者を除く)/立場(複数回答)

	自立指導員	身元引受人	自立支援通訳	受入校教師	日本語教師	生活支援ボラ	日本語支援ボラ	その他
20代 (5名)	0	0	0	3	2	0	0	1
30代 (33名)	9	2	6	11	10	1	1	2
40代 (81名)	18	10	11	16	24	11	12	16
50代 (82名)	25	21	9	11	23	6	8	14
60代 (81名)	33	44	10	0	13	8	14	5
70代以上 (168名)	100	93	34	0	24	24	14	12

(単位:人)

(5) - 3 - A 自立指導員が兼ねる立場

自立指導員にチェックした人のうち36%にあたる67人が自身の役割を自立指導員のみと答えている。別の集計をしてみると、自立指導員も含めて二つの立場を兼務する人は110人、三つとする人は126人、四つの人は68人、五つの人が30人であった。自立指導員との兼務でもっとも多いのが自立支援通訳で、次が身元引受人である。また、日本語教師・日本語ボランティアという日本語を教えるという立場での関わりもあわせて33%あり、およそ3人に1人は自立指導の傍ら日本語も教えていると考えられる。例外はあるとしても、自立指導員は中国語話者が多いことを考えれば、これらの人は帰国者とトータルな面に関わる立場にあるといえるかもしれない。

表8 自立指導員が兼ねる立場(187人中/複数回答)

	自立指導員のみ	身元引受人	支援通訳	受入校教師	日本語教師	生活支援ボラ	日本語ボラ	その他
人数	67	53	63	0	38	26	25	9

(5) - 3 - B 身元引受人が兼ねる立場

ほぼ半数の56%が身元引受人以外に兼務していない。別集計によれば二つの立場に関わる人は36人、約21%で、自立指導員と違って三つ以上を兼ねるのはわずかに3人

るだけである。その立場の性質上これはもっともなことと言えるだろう。身元引受人は自立指導員との兼務がもっとも多く、ついで自立支援通訳だが、自立指導員と比べればその割合は半分で、これは自立指導員ほどには中国語話者であることが要求されないことを物語っているのではなからうか。また、日本語学習支援に関わることの割合も自立指導員と比べれば約半分である。

表9 身元引受人が兼ねる立場（170人中 / 複数回答）

	身元引受人のみ	自立指導員	支援通訳	受入校教師	日本語教師	生活支援ボラ	日本語ボラ	その他
人数	96	53	28	0	14	26	13	8

（6）日本語指導と立場

自立支援通訳と受入校教師の90%以上が何らかの形、あるいはいずれかの時期に日本語指導をしているのがわかる。これらの人たちでは日本語指導の「経験なし」はそれぞれ10%に満たず、日本語指導をするのがむしろ普通であるようだ。また、自立指導員も日本語指導に関わることが多い。身元引受人と生活支援ボランティアは30%前後が「経験なし」となっており比較的日本語指導の関わりは少ないようだ。日本語指導に関わる頻度や形態、費やす時間の多寡は措くとしても、この集計結果を見る限り、帰国者の周囲にいる人々は何らかの形で日本語指導をするものだと考えてもよさそうである。ならば、多様な日本語指導を可能にするような方法や、教材の開発が求められているといえないだろうか。

表10 立場 / 日本語指導（ともに複数回答）
日本語教師、日本語支援ボランティアを除く

	過去に指導	経験なし	現在指導	必要時指導	総計
自立指導員	32	18	35	53	138
身元引受人	26	46	19	36	127
自立支援通訳	10	4	15	21	50
受入校教師	1	2	20	7	30
生活支援ボラ	6	11	8	13	38
その他	10	13	7	6	36

（単位：人）

（7）立場と情報源

いずれの立場に於いても「新聞TV広報」というごく一般的なメディアから情報を得ている人の割合は56%代と高い。特徴的なのは、受入校教師は「研修会」から、自立指導員、身元引受人、自立支援通訳、生活支援ボランティアは「行政等」から、それぞ

れかなり高い割合で情報を得ていることである。

インターネット（INET）もまた特徴的といえる。受入校教師、日本語教師、日本語支援ボランティアといった教師群では25%前後の人が情報源としているが、自立指導員等教師群以外のグループでは、比較的多い身元引受人でも8%程度である。自立指導員、身元引受人の場合は、これは立場に依るといより年代であろう。これらの立場の70%以上が60代以上であり、この年代でのインターネットの活用ははさほど一般的ではないと考えられるからである。

表11 立場（複数回答） / 情報源（複数回答）

	行政等	新聞TV広報	雑誌書籍	支援者	研修会	他機関誌	INET	その他
自立指導員 (187)	131	102	54	55	66	39	7	9
身元引受人 (170)	99	105	38	57	48	35	14	7
自立支援通訳 (70)	51	41	20	17	23	16	4	2
受入校教師 (42)	10	25	16	7	30	7	10	2
日本語教師 (99)	46	54	52	28	40	26	25	8
生活支援ボラ (52)	29	34	16	31	17	20	2	4
日本語支援ボラ (50)	25	26	20	16	20	20	13	2
その他 (51)	26	36	25	17	15	20	11	5

（ ）内の数字は表6の人数による

（単位：人）

（8）過去の記事と希望する記事

（8）- 1 立場 / 興味深く読んだ記事

立場ごとに興味を持って読まれた記事の順位をみると、多く読まれているのは事例」、ついで「行政・施策」で、「巻頭言」と「教材・資料」「教材・資料」が続いている。受入校教師・日本語教師・日本語ボランティア等の、直接教育の現場にある人たちは特に「教材資料」の関心が高いようである。

表12 立場（複数回答） / 興味深く読んだ記事（複数回答）

	巻頭言	地域情報	行政施策	研修会	教材資料	事例
自立指導員	72	67	101	38	57	114
身元引受人	61	54	105	35	39	100
自立支援通訳	27	23	43	14	27	40
受入校教師	16	18	13	15	33	18
日本語教師	35	44	39	35	54	55
生活支援ボラ	21	22	31	12	17	31
日本語ボラ	21	21	23	10	26	32
その他	25	20	32	17	21	32

(単位：人 数字は順位)

立場により、興味ある記事にはそれぞれの傾向は見られるが、どの記事もその立場にかかわらず20%以上の人に興味を持って読まれている。特に印象に残ったものとして書きこみが多かったものは「巻頭言」「事例」であるが、「巻頭言」以外に具体的な記事名が書かれていたものを紹介してみたい。

第3号：「田路さんの事例」(二世の編入学支援)

第8号：「伝達言語と学習言語」

第10号：「ねえ、先生どうしてたたかないの？」(日中学校文化の違い)

第11号：「ほっとできる場所をめざして」(ボランティア活動紹介)

第13号：「ふじみの国際交流センターの活動」

第16号：「10回目のチャレンジ、運転免許証」、「サハリン交流協会訪問記」

第18号：「介護ヘルパー講習会」、「人生はリハビリ」(高齢帰国者の事例)

第19号：「土曜スクール」(子どもたちの学習支援)、「夢と努力と」(二世青年の進路選択)

(8) - 2 立場 / 希望する記事

表13 立場(複数回答) / 希望する記事(複数回答)

	教材等	職業進路	就籍等	精神衛生	年金医療	育児保育	支援理論	対処事例	対外国人	子ども	その他
自立指導員	73	100	48	38	65	10	37	97	21	33	4
身元引受人	42	91	55	20	67	4	33	87	18	18	3
自立支援通訳	29	40	27	16	28	8	13	34	10	13	1
受入校教師	28	19	3	9	3	1	10	22	5	30	3
日本語教師	55	46	14	18	14	7	32	46	19	47	5
生活支援ボラ	17	33	18	6	18	2	15	26	7	11	
日本語ボラ	23	24	11	7	19	3	16	29	10	19	2
その他	16	25	7	12	12	7	10	25	15	22	3
	283	378	183	126	226	42	166	366	105	193	21

(単位：人 数字は第5位までの順位)

よく読まれた過去の記事同様、いずれの立場からも希望があったのが「対処事例」「職業進路」である。「対処事例」に関していえば、様々なケースから、自身が関わる帰国者への対処ヒントを得たいということかもしれない。受入校教師や日本語教師を除いて、「年金医療」についての要望も多かった。帰国者の高齢化に伴う必然の帰結といえる。また、「子ども」に関する要望が受入校教師や日本語教師から多く寄せられた。

(9) インターネットの可能性

ホームページ(HP)の閲覧経験やパソコン操作能力について年代との関連で見てみる。20代は総数が少ないので30代からを見ると、「全然使えない」という人の割合が年齢とともに多くなる。「全然使えない」人は6・70代では半数以上を占めるが、この年代はその70%以上が自立指導員や身元引受人であることを考えると、「立場/パソコン操作」にもはっきりした傾向が現れることになる。また、「HP閲覧経験」の有無は自在にパソコン操作ができるかどうかに対応しているようである。しかし、70代以上でも、家族等の助けを借りることを含めれば40%程度の方がパソコンが利用できると答えているのは心強い。

表14 年代 / HP 閲覧経験

	ある	ない	総計(人)
20代	3	2	5
30代	10	21	31
40代	27	54	81
50代	21	56	77
60代	6	67	73
70代以上	19	128	147
総計(人)	86	328	414

表15 年代 / パソコン操作

	自在	少し	全然	家族等	総計(人)
20代	3	2			5
30代	10	16	4	2	32
40代	26	34	10	8	78
50代	10	32	17	14	73
60代	6	19	35	6	66
70代以上	7	27	85	19	138
総計(人)	62	130	151	49	392

(10) 数値以外の記述について

『同声・同気』で紹介したい人や活動として書かれたもののいくつかは、すでに紹介したことがあるものであったが、自薦他薦を問わず、私たちが知らない団体や活動もあり大変興味深く読ませていただいた。いずれ事例紹介のコーナーや教材・資料、「地域アラカルト」(地域の支援活動紹介)のコーナー等で取り上げていきたいと考えている。

また、質問以外のところに書き込みをしてくださった方も多くいた。それは例えばご自身の帰国体験であったり、関わった帰国者についての感想や思いであったりした。帰国者支援に関する提言や主張もあった。また、巻頭言を日本語教員志望の大学生に読ませたという大学の先生の記述や、官民間問わずマスコミや国際交流団体などにどんどん配布してほしい、などという、作り手としては大変励まされる書き込みもあった。『同声・

同気』は帰国者支援の関係者には無料配布なのだが、購読料を払いたいといってください方もいて、読者の方々に大きな声援を頂いたものと心から感謝している。

・まとめ - 『同声・同気』の今後の課題 -

個々の集計結果から総合した支援者像として二つが考えられる。一つは帰国者に関わるについては自身も直接的な動機を持ち、長い間自立指導員や身元引受人、自立支援通訳などとして帰国者の身近にいる、60代以上の比較的高齢な方々である。もう一つは日本語教師や受入校教師、日本語ボランティア等、日本語教育や学校教育のフィールドで帰国者に関わっている、比較的若い年代の人たちである。

帰国者二世世代についていえば、この年代は家族を支え、子どもを育てるために悪戦苦闘する年代であるのが一般的であり、自身の日本語学習に使う時間的な余裕はさほど残ってはいないだろうことを前提にして、その学習支援の内容と形態を工夫しなければならないだろし、その親世代 - 帰国孤児世代 - の高齢帰国者に対しては、特にその日本語習得に関わる支援の発想を転換する必要があると考える。気力・体力の面で、一世世代が日本語を学習して人生の新しいステージに踏み出すことは非常に困難なことといってよい。高齢帰国者には、「今あるままで」を受け入れるような「場」の提供、日常的な支援の形を考えたい。

当然のことながら、三世に対しては全く別の支援が必要だろう。日本で確実に根を下ろし、将来の生活を視野に入れて人生の基盤を築くための時期にある彼らに、何が必要か。いわゆる子どもの問題は、日本語だけでなく母語保持や教科学習も視野に入れた学習支援を要請してくるものである。

アンケートから見てきた支援者像もまた一様ではない。帰国者の年代もますます多様化している。それぞれの年代に対応する支援も多様な形態、多様なプログラムが求められている。私たちは今以上に、こうした状況を念頭に置いて、提供する記事内容を検討していく必要がある。

様々に読者構成を検討することで、今後私たちが『同声・同気』で取り上げるべき記事内容の方向性も出てきたといえる。私たちが当初からそれに沿って紙面構成を考えてきた「地域情報」「行政・施策」「教材・資料」「研修会」の四つの柱は変わらないとしても、これらに「読者構成」「帰国者の年代構成」の要素をクロスさせてそれぞれに有効なきめ細かい記事情報を提供していきたいと思う。

また、現時点での読者のインターネットの普及状況を見る限り、紙媒体での情報提供は当分必要である。しかし、インターネットのますますの普及は、紙媒体とはまた違った情報の選別と提供を要請してくるはずだが、このような状況は帰国者支援の裾野を広げるに恰好の機会でもある。インターネット上の不特定読者が帰国者に興味・関心を持ち、帰国者支援をより身近なこととして認識してくれるような情報を提供していきたい。帰国者支援は、帰国者の側からみれば、「よき隣人」の獲得がその第一歩といえると思うからである。私たちは、紙媒体、インターネット双方のメリットを生かすような紙面づくりを続けていきたいと思っている。

アンケートにご協力くださったみなさん、ありがとうございました。

【資料】読者アンケート

都・道・府・県() 氏名() 所属()

年代と性別を教えてください。

- a 20代 b 30代 c 40代 d 50代
e 60代 f 70代以上

-
a 男性 b 女性

ご自身は次のいずれに該当されますか。 をおつけください。

- a 戦後間もない頃の引き揚げ者 b 帰国者本人
c 中国、台湾等中国語圏の出身者 d その他の外国出身者
e その他

帰国者とはおもにどのような立場に関わっていますか。活動歴は何年ですか。

- a 自立指導員 b 身元引受人
c 自立支援通訳 d 受入校教師
e 日本語教師 f ボランティア(おもに生活支援)
g ボランティア(おもに日本語支援)
h その他()

-
a 1年未満 b 1年以上2年未満 c 2年以上5年未満
d 5年以上10年未満 e 10年以上

上記 e日本語教師および gボランティアでの日本語支援 以外の方にお尋ねします。

- a 現在、日本語の指導もしている。
b 現在、必要に応じて日本語指導をすることがある。
c いままで日本語の指導をしたことがある。
d 過去、現在ともに日本語の指導はしたことはない。

帰国者以外の外国人支援活動にも何か関わりがありますか。

- a ある b ない

このニュースレター以外に活用する情報源としてどんなものをお持ちですか。
(複数回答可)

- a 行政等からの通知等 b 新聞、テレビ、自治体の広報等
c 雑誌、書籍等 d 支援者仲間 e 研修会
f 『同声・同気』以外の機関紙誌 g インターネット
h その他()

いままでの掲載記事の中で興味を持ってお読みになったのはどの分野ですか。
(複数回答可)

- a 巻頭言
b 各地の二次センター、再研修、学校、団体やグループ等の活動
c 厚生省等の帰国者援護に関する行政施策
d 研修会の報告や開催予定
e 教材、参考資料
f 帰国者の定着事例や支援事例
とくに印象に残った記事がありましたらお書きください。()

今後どのような記事を取り上げてほしいと思いますか。(複数回答可)

- a 日本語教材、指導法・日本語指導事例
b 職業、就労、進路選択関係
c 就籍、呼び寄せ
d 精神衛生関係
e 年金、介護、医療関係
f 育児、保育関係
g いろいろな支援活動を支える理論やノウハウ
h 帰国者の自立事例やトラブルへの対処事例
i 帰国者以外の定住外国人等への取り組み事例
j 子どもの日本語習得や母語保持、教科学習支援等
k その他()

知人、グループもしくはご自分の取り組みや活動で紹介なされたいものがありましたら、どうぞご紹介ください。

()
連絡先:

今後継続して『同声・同気』の送付を希望なさいますか。

- a 希望する b 希望しない

センター教務課ではインターネット上にホームページ『同声・同気』を開設し、皆さんにお送りしているニュースレターもホームページで見ることが出来ます。今までにセンターのホームページをご覧になったことがありますか。

- a ある b ない

「ある」と答えた方、どこでご覧になりましたか。

- a 自宅で b 職場で c 図書館等公共の場所で
d 学校で e その他

インターネットを活用するためにパソコン等がどの程度操作できますか。

- a 自在に使える b 少し使える c 全く使えない
d 自分では操作できないが家族や同僚の助けを借りて利用できる